

早稲田大学博士論文(概要)		
	学位記	文科省報告
2005	4172	① 乙 2168

論文概要書

近代英和辞書の訳語に関する研究

李 慈鎬



Ⅰ 訳語研究の目的と方法

1 研究の目的

古代から日本は、主に中国、朝鮮といった漢字文化を共有する国々と交流し、先進の文物の受け入れてきた。しかし、16世紀を境として西洋のほうにその中心的な輸入先がかわるようになる。

西洋の先進文物の受け入れは、鎖国の完成(1641年)により一時、沈滞することになるが、洋書の輸入解禁(1720年)により先進文物の受け入れは再び盛んになり蘭学の隆盛期を迎える。特に、第5次鎖国令(1639年)によりオランダ以外の西洋人の来日を禁止して以来、江戸時代中期にはオランダを中心とした文物の交流が多く、通詞たちはそれに関わる種々の書籍を著した。その中で特に、医学、化学、語学に関する著述活動は注目に値する。

幕末には、英国・米国との政治的な関係により英語に関する関心が高まってきた。特に、日米和親条約締結(1854年)を機にしてオランダ以外に英国・米国との関係が緊密になってくるし、以前より広い分野で交流が行われるようになる。

このような時代の趨勢を反映して、洋書の出版とともに対訳辞書の編纂も盛んに行われるようになる。洋書などを通して紹介される西洋の新しい文物や概念を理解するためには、外国語の意味を理解する必要があるからである。その際、一つの問題になったのは外国語の意味を表す言葉の不足である。以前になかった活発な文化交流のため、西洋の新しい事物や概念などを表す言葉が足りなくなったのである。このような言葉の不足を解決するため、江戸末期・明治初期には中国から言葉を受け入れることや新しく言葉を造ることなどが行われた。江戸末期・明治初期に西洋の新しい文物に接し、それを表現するための新しい言葉を求めた知識人たちは、漢学の教養のある階層であった。そのため、外国語の意味を表すために造られた言葉は、漢語(字音語)が大部分を占める。このように、日本で造語された言葉の大部分はもちろんのこと、中国から受け入れた言葉は漢語に分類できる。こうして、江戸末期・明治初期の対訳辞書にはその訳語として漢語が大部分を占める結果になる。

ところで、対訳辞書の編纂においても、時代相は反映される。つまり、江戸時代の初・中期には蘭学の隆盛により主にオランダ系統の辞書が多かったが、江戸末期からは英学の発達により英国・米国系統の辞書が多くなる。

本論文では、明治初期に編纂された代表的な英和辞書である子安峻・柴田昌吉編『附音挿圖英和字彙』(1873)とその再版である『増補訂正英和字彙』(1882)を資料として江戸末期・明治初期の訳語に関して考察する。つまり、江戸末期・明治初期における漢語研究の一環として『附音挿圖英和字彙』と『増補訂正英和字彙』に見られる訳語の性格を明らかにするとともに、両辞書の特徴・意義を究明することを目的とする。

2 先行研究の概要

本論文では、書誌に関する研究、訳語に関する研究、振り仮名に関する研究の3領域に

分け、先行研究を調査した。

書誌に関する研究では、豊田実（1939）と竹村覚（1962）の研究がある。これらの研究では、『附音挿圖英和字彙』がイギリス系の英和辞書に分類されることやその著者である柴田昌吉・子安峻が日就社を設立し辞書を刊行した経緯などが明らかにされている。

訳語に関する研究では、森岡健二（1955）の研究など、『英華字典』（1866－1869）との影響関係に関する研究が目立つ。

振り仮名に関する研究では、漢字との関係、振り仮名の形態的・量的調査などを含め、近代の振り仮名に関する多様な研究が行われてきた。飛田良文（1978）の研究では、『附音挿圖英和字彙』には「幸福(サイワ)なる」「名誉(ホリ)なる」のように振り仮名と漢字表記語とが一致しないものがあるが、これらの振り仮名が不必要になり、「幸福」「名誉」などが字音で読まれるようになったとき、訳字と訳語とが統合され、今日の訳語が成立したと『附音挿圖英和字彙』の振り仮名に関して訳語の成立と関連付けて見解を示している。

3 資料と方法

本論文では、早稲田大学中央図書館所蔵本『附音挿圖英和字彙』（1873）と『増補訂正英和字彙』（1882）を研究の資料として用いている。早稲田大学中央図書館には、『附音挿圖英和字彙』と『増補訂正英和字彙』が二冊ずつ所蔵されている。いずれも日就社のもので、各々、同じ板のものと見られる。

実際の分析のためには、両辞書の訳語を網羅したデータベースを作成した。このデータベースは、『附音挿圖英和字彙』と『増補訂正英和字彙』（以下、両辞書を表す際には『英和字彙』と略称する）の本文中、見出し語、見出し語の品詞、見出し語の訳語として用いられた漢字表記語と振り仮名を収録したものである。このデータベースには、見出し語数や訳語数など所収語彙の量的分析のための情報が含まれる。

国会図書館には、数種の『附音挿圖英和字彙』の異本が所蔵されている。1885年から1889年の間に刊行されたもので、段数が異なったり挿図が削除されていたりするが、いずれも日就社の『附音挿圖英和字彙』（1873）を底本として見られる。

II 『英和字彙』の訳語の分析

4 『英和字彙』所収語彙の量的分析

今まで、『附音挿圖英和字彙』と『増補訂正英和字彙』の体裁や訳語数などに関する大要は、その緒言によるのが一般的であった。今回、データベースの作成にともない、見出し語や訳語の総語数が調査できた。

〈表1〉には、『附音挿圖英和字彙』（以下、初版と略称する）と『増補訂正英和字彙』（以下、再版と略称する）の見出し語数を対比して示した。初版における見出し語の総数は、54643語、再版における見出し語の総数は61552語であり、再版では初版に比べ、6909語の見出しが増補された。品詞別見出し語数では、初版と再版のどちらも、名詞がいちば

ん多く、次いで形容詞、動詞、副詞の順になる。

〈表 1〉 見出しの品詞別語数（初版と再版）

品詞	初版	再版
名詞（n）	27799（ 50.9）	32731（ 53.2）
形容詞（a）	14091（ 25.8）	15427（ 25.1）
動詞（v）	7958（ 14.6）	8309（ 13.5）
副詞（adv）	3885（ 7.1）	4009（ 6.5）
その他	910（ 1.6）	1076（ 1.7）
計	54643（100.0）	61552（100.0）

再版の見出し語数の変動において特徴的なことは、名詞の増補である。他の品詞では、その語数は増えたが、その比率は大体下がっている。しかし、名詞だけは語数と比率の両面で高くなっている。名詞を中心とした見出しの増補がうかがえる。

〈表 2〉には、『増補訂正英和字彙』の総訳語数を初版と対照して示した。再版の総訳語数は、初版に比べて 22876 語が増えた。全般的に、各品詞の見出しに対応する訳語は増加されている。特に、名詞（n）に対応する訳語の増加は、目立ってるが、これは明治初期の英和辞書として西洋の新概念や文物を表す語を中心に増補しようとしたことと関連があると思われる。

〈表 2〉 見出しに対応する訳語数の比較

品詞	初版	再版
名詞（n）	52012（ 43.6）	65014（ 45.7）
形容詞（a）	28600（ 24.0）	32849（ 23.1）
動詞（v）	22655（ 19.0）	24839（ 17.5）
副詞（adv）	8573（ 7.2）	9451（ 6.7）
その他	7440（ 6.2）	10003（ 7.0）
計	119280（100.0）	142156（100.0）

5 『附音挿圖英和字彙』の訳語

訳語とは、見出し語に対応して付けられた語や句のことである。『附音挿圖英和字彙』の訳語は、漢字片仮名交じりの部分（以下、漢字表記語と略称する）とその多くの漢字に付されている振り仮名で構成されている。

本論文では、漢字表記語と振り仮名の各々の性格に関して分析した上、その両者の対応関係を三分類し考察を進めた。

漢字表記語の研究としては、二字漢字表記語の語種や出自に関する調査を行い、その性格を明らかにした。二字漢字表記語は、漢語（字音語）が全体の 76%を占めている。その漢語を対象にし、中国と日本での出自時期を調べたのが〈表 3〉である。

〈表 3〉 初出時期による漢語の分類

	漢語の初出時期	語数 (%)
A. 漢籍に 典拠が ある語	① 日本では近世前期以前までに用例が見られる語	3754 (53.4)
	② 日本では近世後期以後の用例が見られる語	1226 (17.5)
	③ 日本では初出時期が確定できない語	1203 (17.1)
	計	6183 (88.0)
B. 漢籍に 典拠が ない語	④ 日本では近世前期以前までに用例が見られる語	382 (5.4)
	⑤ 日本では近世後期以後の用例が見られる語	297 (4.2)
	⑥ 日本でも初出時期が確定できない語	167 (2.4)
	計	846 (12.0)
合計 (A + B)		7029 (100.0)

〈表 3〉によれば、『附音挿圖英和字彙』に載っている二字漢語の大部分 (88.0%) が、漢籍に典拠を有する語であることが分かる。このうち、日本では近世後期以後の用例が見られる語は、主に、中国の古代漢語であるが、日本ではこれらを転用するか、中国古典の漢語とは別の意味を示すようにした語と見られる。

漢籍に典拠がない語は、日本で造語された語である可能性が高い。特に、日本では近世後期以後の用例が見られる語は全体の 4.2% を占めているが、これらは日本で蘭学者や明治初期の知識層により造語された新語と見られる。

振り仮名に関する研究としては、『附音挿圖英和字彙』における振り仮名の語数や付け方に関して調査を行った。『附音挿圖英和字彙』には、総数 119280 語の訳語が載っているが、その 72% に及ぶ 85902 語に振り仮名が付されている。この振り仮名は、「語根を同じくする見出し語ごとに、同漢字表記語のものうち、初出の漢字表記語に振り仮名をつける。ただし、振り仮名の語形が変われば改めてつけなおす」という振り仮名の付け方により付けられている。

上に述べたように、『附音挿圖英和字彙』の漢字表記語は、その初出時期により、日本では近世前期以前までに用いていた語、近世後期以降の中国語の転用あるいは日本での造語など、その性格が異なる。『附音挿圖英和字彙』の振り仮名は、このような漢字表記語の性格を反映していると思われる。

本論文では、漢字表記語と振り仮名との関係を「音読みの訳語」「訓読みの訳語」「意味読みの訳語」の三分類し、各々の特徴に関して分析した。

「音読みの訳語」とは、訳語を構成している漢字表記語の字音をあらわす振り仮名がついている訳語である。たとえば、二字漢字表記語「到着」のような、漢字表記語を「A + B」に分けた場合、それに対して「A の音 + B の音」という振り仮名がついている訳語である。

例) 音読みの訳語

見出し	漢字表記語	振り仮名
Appulse	到着	トウチャク
Fistula	透穴瘡	トウケツサウ
Head-dress	頭巾	ヅキン
Lens	透鏡	トウキヤウ
Molasses	糖蜜	タウミツ
Pervasion	透徹	タウテツ
Skull	頭殻	トウコク
Transparence	透明	トウメイ

近世前期以前までに用いていた漢語（字音語）が大部分であるが、蘭学者により造語された化学用語（たとえば「水銀（スイギン）」）や医学用語（たとえば「大腸（ダイチャウ）」）なども含まれている。

「訓読みの訳語」とは、漢字表記語を構成している漢字一つ一つの字訓の振り仮名が付されている語である。たとえば、二字漢字表記語「溶薬」に対して、それを構成している各漢字の字訓である「トカシ」「クスリ」が振り仮名として付されているような、漢字表記語と振り仮名の対応関係にある語である。この分類に属する語は、近世前期以前から用いていた日常語の和語である。

例) 訓読みの訳語

見出し	漢字表記語	振り仮名
Filth	垢	アカ
Fall	秋	アキ
Menstruum	溶薬	トカシ [°] スリ
Masticatory	嚼物	カモノ
Gangway	出入口	デ [°] イリクチ

「意味読みの訳語」とは、該当の漢字表記語をなしている漢字の字音または字訓ではなく、漢字表記語の持っている意味に類似する振り仮名が付されている語である。たとえば、「委員（Delegate）」に付されている振り仮名「ミヤウダイ」のように、漢字表記語の意味に相当する振り仮名が付されている語である。「案山子(カシ)」「蜥蜴(ケモ)」など熟字訓は、意味読みの訳語に分類した。

例) 意味読みの訳語

見出し	漢字表記語	振り仮名
Babe	嬰兒	ミト [°] リゴ [°]
Chamberer	淫行者	インランモノ
Charge	船貨	ツミニ
Clock	自鳴鐘	リンウチトケイ
Coverture	婦	ヨメ

Craving	愛慕	シタヒ
Delegate	委員	ミヤウダ ^イ
Dislike	憎惡	ニクミ
Exercise	演習	ケイコ
Opera	演劇	シハ ^イ
Paraclete	安慰者	ナグサメテ
Pilot	引水人	ミヅサキアンナイ
Press	印書機	ハンスリキカイ
Prophet	解義者	イミトキニン
Whim	起水機	ミヅアゲジ ^カ

意味読みの訳語は、9384 語（異なり語数）で他の読みの訳語に比べて語数が一番多い。意味読みの訳語には、近世後期以後、中国語からの受け入れたものや日本で造語した語が多く含まれていると見られる。意味読みの訳語に付されている振り仮名は、このような馴染んでいない漢字表記語に対する読者たちの理解を助けるためのものであると考えられる。

6 『英華字典』との比較からみた『附音挿圖英和字彙』の訳語

『附音挿圖英和字彙』は、ロブシャイド（Lobscheid）の『英華字典』（1866-1869）の影響を受けた英和辞書として知られている。

本論文では、『附音挿圖英和字彙』の名詞形見出し語に対する単語訳の訳語 41332 語（延べ語数）を『英華字典』の訳語と一致するか否かにより分類した。

〈表 4〉『英華字典』との比較からみた単語訳

区分	語数（％）
一致する	7994（ 19.3）
一致しない	33338（ 80.7）
計	41332（100.0）

森岡（1955）では、『英華字典』と同じ訳語を有する『附音挿圖英和字彙』の見出し語は 47.2％である。〈表 4〉に掲げた一致する訳語数を基準にすれば、見出し語を基準にした場合に比べ、その割合は低くなる。

『英華字典』と一致する二字漢字表記語を対象に、『附音挿圖英和字彙』における『英華字典』の影響に関する検討を試みた。

『附音挿圖英和字彙』の訳語のうち、『英華字典』と一致する二字漢字表記語の語種、初出時期を基に、『英華字典』の影響である可能性がある語を調査し、全 3680 語（延べ 5776 語）のうち、直接に『英華字典』の影響を受けた可能性がある語は 760 語（延べ 904 語）であるという結果を得た。この結果は、『附音挿圖英和字彙』が『英華字典』の影響を強く受けたと指摘する先行研究とは相反するものと言わざるをえない。ただ、キリスト教用語を含む『英華字典』の影響と見られる語は確かに存在する。

この結果については、先行研究と本論文との調査方法の違いについて考える必要がある。つまり、先行研究では『英華字典』の訳語と同形の漢字表記語はもちろん、共通の漢字を用いている語なども含んで『英華字典』の影響ありと判定しているようである。ところが、本論文では同形の漢字表記語であることはもちろん、その語種が漢語であり、かつ、1800年代以降の出自であることを影響関係の判定条件としている。したがって、現在、『附音挿圖英和字彙』の訳語に対するロブシャイド (Lobscheid) の『英華字典』(1866-1869) の影響を確言するには、まだ、十分な研究が行われていないというのが妥当かもしれない。

『英華字典』からの直接の影響であるか否かはともかく、中国語の影響を受けたのは間違いないと見られる例は確かに見られる。

[中国語の影響を示す語]

- ・中国固有のものを表す語

売春斡旋業者 : jobber, n. ナカガヒ 牙行

清代武官の名 : centurion, n. ヒヤクニンガシラ 百 総

- ・その他、中国語と見られる語

curd, n. イドホリ 井工

digger, n. カタチチ 凝乳

likeness, n. ニガホ 肖顔

wedding-feast, n. シウゲンブルマヒ 婚 宴

訳語が十分整っていなかった明治初期、『附音挿圖英和字彙』の訳語に中国語を借用するのは、造語をするより容易だったであろう。ただ、このような中国語の借用は日本語として馴染まず、現在には用いられていない語が相当含まれる結果を生んだ。

[現在には用いられていない語]

disinclination, n. イヤガリ 惡忌

provocation, n. イカラセ 触怒

solicitude, n. 費心

sting, n. ハリ 刺劍

7 『増補訂正英和字彙』の訳語

1882年、『附音挿圖英和字彙』(1873)に増補や訂正を行った『増補訂正英和字彙』(柴田昌吉・子安峻共著、日就社)が刊行される。『附音挿圖英和字彙』の刊行から9年しか経っていないのに、見出し語と訳語の大幅な増補や訂正を行っている。

再版の訳語は、総数142156語で、初版に比べ22876語が増補された(〈表2〉参照)。特に、再版で見出し語が新たに増補されたのは8926語であり、それに対応する訳語は11636語である。この11636語における単語訳と句訳の割合を〈表5〉に示した。

〈表 5〉再版における単語訳と句訳の割合

訳語の形式	延べ語数 (%)	異なり語数 (%)
単語訳	9468 (81.7)	8531 (81.2)
句訳	2119 (18.3)	1981 (18.8)
計	11587 (100.0)	10512 (100.0)

注) 訳語に「同上～」を含むもの(延べ語数 49 語)は除いた。

〈表 5〉によれば、再版では単語訳の割合が高いことが分かる。このうち、単語訳 8531 語(異なり語数)における品詞の分布を調査した〈表 6〉。

〈表 6〉品詞の分布

品詞の分類	延べ語数 (%)	異なり語数 (%)
体言類	8200 (86.6)	7483 (87.7)
用言類	1020 (10.8)	849 (10.0)
相言類	208 (2.2)	162 (1.9)
その他	40 (0.4)	37 (0.4)
計	9468 (100.0)	8531 (100.0)

〈表 6〉によれば、再版で増補された見出し語に対応する訳語は体言が大部分(87.7%)である。これは、明治初期の英和辞書として西洋の発達した文物をあらわす見出し語を多く載せた結果、それに対応する訳語(主に体言)も大幅に増加したと推測される。実際に、体言類に属する 7483 語のうち、3894 語が特定分野にかかわる訳語である。

〈表 7〉には、訳語数が 65 語以上の分野を語種とあわせて示した。〈表 7〉によれば、生物学と医学にかかわる訳語が多くて、継いでは化学、地理・地質、哲学の順になる。

生物学の訳語は、「無頭動物(acephalous)」「細胞膜(cellouse wall)」のような学術性の高い語も含まれているが、「海綿(spongia)」「加酒打(cassada、樹名)」「海月(medusa)」「蜂(apis)」「浮萍(duck-weed)」のような動植物名が占める割合が高いことが特徴である。生物学の訳語 824 語のうち、動植物名は 577 語に及ぶ。他の分野に比べて和語が多いのは、「海月(medusa)」「蜂(apis)」のような動植物名によるものである。

生物学、化学、地理・地質にかかわる用語には、混種語や外来語が他の用語に比べて多い。これは、動植物名、化学成分、鉄鉱石を表す際、混種語や外来語が多用されたからである。特に、化学成分を示す訳語には、135 語の混種語(例:「富律阿兒水素酸(hydroflute)」)、128 語の外来語(例:「普魯的印(protein)」)が用いられている。漢語の使用を主としていた再版ではあるが、これらを表す際には混種語と外来語を使用せざる得なかったであろう。

〈表 7〉 主な特定分野にかかわる訳語とその語種

分野	漢語	和語	外来語	混種語	計
医学	759	8	11	39	817
化学	287	0	128	144	559
軍事	68	0	0	2	70
工学	143	0	0	8	151
宗教	55	1	0	18	74
数学	110	1	0	0	111
生物学	591	141	43	49	824
地理・地質	169	5	20	35	229
哲学	210	0	0	4	214
天文・気象	65	1	1	1	68
法律	68	0	0	0	68

『増補訂正英和字彙』では、『附音挿圖英和字彙』の訳語に対して訂正を行った。〈表 8〉には、各分類における再版の語数を単語訳と句訳に分けて示した。括弧内は、延べ語数である。〈表 8〉は、訂正が行われた箇所に関する分類なので句訳の数はその句訳の中で、語構成要素レベルや単語レベルでの訂正が行われたことや訂正の結果、句訳になったことを意味する。つまり、「単語の補足」「単語から句へ」の句訳数には、訂正の結果、句訳になった数が含まれている。

〈表 8〉 訂正の語数分布

	訂正の分類	単語訳	句訳	計
語 構 成 要 素 のレベル	単字の交替	408(478)	214(236)	622(714)
	単字の追加	157(188)	88(4)	245(282)
	単字の削除	133(164)	210(250)	343(414)
	字順の入替	190(281)	26(28)	216(309)
単 語 の レ ベ ル	単語の交替	3435(4624)	987(1095)	4422(5719)
	単語の補足	7(8)	26(26)	33(34)
	単語の削除	8(8)	4(4)	12(12)
句のレベル	句から単語へ	3115(3614)	該当なし	3115(3614)
	単語から句へ	該当なし	350(405)	350(405)

〈表 8〉によれば次のような訂正の特徴が考えられる。

- ・ 訳語の訂正には、初版の訳語（単語）を別の訳語（単語）に変える「単語の交替」がいちばん多く用いられた。
- ・ 再版では、句訳（初版）の多くを単語訳に変えている。

訂正された訳語に関する研究の一環として、〈ヒト〉をあらわす造語成分「者」をとりあ

げ、造語成分「者」を含む三字漢字表記語の語構成・意味的特徴に関する分析を試みた。

『増補訂正英和字彙』に見られる〈ヒト〉をあらわす造語成分のうち、造語成分「者」はいちばん多く用いられている。

特に、『附音挿圖英和字彙』の訳語のうち、「人」を含む訳語を『増補訂正英和字彙』では造語成分「者」を含む三字漢字表記語にした訳語が多く見られる。

例)「人」を含む漢字表記語を「□□+者」に交替

初版	再版
election, n. 被選人	election, n. 被選者
nuncio, n. ^{シラセニン} 報 人	nuncio, n. 報知者
partner, n. ^{トモワケニン} 共 分 人	partner, n. 共分者

例)「人」を含む句訳を「□□+者」に変更

初版	再版
divorcer, n. 離婚スル人	divorcer, n. 離婚者
emulator, n. 競フ人	emulator, n. 競争者
scrutineer, n. 細密ニ査問スル人	scrutineer, n. 細査者
sharer, n. ^{カカワリアヒ} 関 係 ノ 人	sharer, n. 関係者

これは、造語成分「者」が「人」に比べて比較的新しい語感を伴うことや結合する語基との関係が「人」より自由であるからである。ただし、再版では〈ヒト〉を表す訳語として「□□+者」を多く用いているが、現代では用いない語が相当見られる。

[現代では用いていない□□+者]

初版	再版
boxer, n. 拳ニテ闘フ人	boxer, n. 闘拳者
depopulator, n. 民ヲ滅ス人	depopulator, n. 滅民者
misbeliever, n. 信ジ錯フ人	misbeliever, n. 借信者
mouser, n. ^ト 鼠ヲ捕ル人	mouser, n. 捕鼠者

これは、中国語では〈～スルヒト〉という句の用法を持つ中国語の「者」の用法を活用していながらも、日本語としては、文字列上、単語訳に用いられたという両面性を持った

め、その文字列そのものが日本語の単語として定着しにくかったであろう。『附音挿圖英和字彙』で中国語を借用したことと同じく、中国語の用法を活用した「□□+者」は訳語、特に、単語訳の訳語を『増補訂正英和字彙』に載せることまでは可能であったが、日本語の訳語としては受け入れられなかったと考えられる。

〈表 9〉 振り仮名数の比較

	初版	再版
振り仮名数	85902	6147
総訳語数	119280	142156

〈表 9〉で見ると、『附音挿圖英和字彙』に比べ『増補訂正英和字彙』では振り仮名が多く減少している。再版である『増補訂正英和字彙』に見られる振り仮名の例を見ると、次のようである。

例)『増補訂正英和字彙』の振り仮名

・動植物名

bul, n	ヒラメ 鞋底魚	corn-poppy, n	ビジンサウ 麗春花
dryandra, n	アヲギリ 梧桐	ear-shell, n	アハビ 石決明
leontodon, n	タンボウ 蒲公英	seal-leopard, n	アザラシ 海豹

・江戸末以後の漢字表記語

bulletin-board, n	カウサツ 掲示板	bulletin-board, n	シバイ 演劇
-------------------	-------------	-------------------	-----------

・外国語を含む語・副詞など

alkarsin, n	カテツト 加埜篤氏発烟水	all, a or adv	アラユル 所有
almost, adv	ヤヤ 差	barefacedly, adv	ムヤミ 唐突に

上の例のように、再版では語形が分かりにくい漢字表記語に振り仮名を付し、振り仮名数を最小限にとどめようとしたため、再版では振り仮名数が大幅に減少したと見られる。また、漢字の字音読み化や送り仮名による語形の明確化も振り仮名が大幅に減少した理由と考えられる。

下の例で、初版の「固守ル」「禁止ル」(「defend, vt.」)は再版で「固守スル」「禁止スル」とサ変動詞化している。また、「著明キ」(「signal, a.」)は再版で「著明ノ」に修正されている。振り仮名を参照すれば、初版の「シカトマモル(固守ル)」「トドムル(禁止ル)」が「コシュスル」「キンシスル」、初版の「イチジルシキ(著明キ)」が「チョメイノ」と再版では漢字を字音読みするようになったと見られる。このように、漢字の字音読み化は再版で振り仮名が減少につながる可能性がある。

例) 漢字の字音読み化

初版	再版
defend, vt. ^{フセ} 防グ ^{コバ} 拒ム ^{カウ} 抗スル	defend, vt. 防グ 拒ム 抗スル
^{ササ} 支ヘル 守衛ル	支フル 守衛スル 固守スル
^{シカトマモ} 固守ル ^{トドム} 禁止ル	禁止スル 保護スル
保護スル	
signal, a. ^{イチジルシ} 著明キ	signal, a. 著明ノ

以下のように、送り仮名を変更し語形の明確化を図った語が見られる。

例) 送り仮名の変更

初版	再版
abridge, vt. ^{ミジカ} 短 フスル ^{ツツ} 約 ムル	abridge, vt. 短クスル 約ムル
^{チヂ} 縮 ムル ^{リャク} 略 スル	縮ムル 略スル 除キ去ル
^{ノゾキサ} 除 去ル	
in earnest. ^{ハタシ} 果 テ	in earnest. 果シテ
transcend, vt. ^{コユ} 超ル ^{スグレ} 勝ル	transcend, vt. 超ユル 勝ル
transcendent, a. 超タル 勝タル	transcendent, a. 超エタル 勝レタル
卓越タル	卓越シタル

上の「除去る (abridge, vt.)」は、振り仮名を付していなかったら、どう読むか戸惑いがあったと思うが、再版では送り仮名を送ることにより「ノゾキサル」と語形を明確に示している。特に、「果テ (in earnest.)」「勝タル (transcendent, a.)」は、振り仮名をふしていなかったら「ハテ」と「ハタシテ」、「カチタル」と「スグレタル」の語形のうち、どれが語形なのか分からないはずであろう。このような場合、再版では「果シテ」「勝レタル」と送り仮名を送ることで、語形がわかりやすくしている。

この他、振り仮名の減少の背景には、漢語流行の時代相、印刷上の問題、教養のある読者層を対象にしたことなどもあるであろう。

III 終章

8 『英和字彙』の性格と今後の研究に関する展望

本論文では、近代の語彙とりわけ漢語に関する研究の一環として、柴田昌吉・子安峻により編纂された英和辞書『附音挿圖英和字彙』（1873、日就社）とその再版として刊行された『増補訂正英和字彙』（1882、日就社）の訳語に関する研究を行った。

これを取り上げたのは、江戸末期・明治初期に行われた活発な西洋との文化交流の中、この時期の語彙とりわけ漢語の増加がよく反映されていると思ったからである。

『附音挿圖英和字彙』は、調査の結果、54643語の見出し語に総数119280の訳語を掲げた膨大な辞書であることが明らかになった。その訳語は、漢字表記語と振り仮名で構成されている。漢字表記語は、外国の新しい概念や物事を積極的に吸収しようとする明治初期の時代相を反映したため、体言類に属する語が総訳語数の43.6%（52012語）と高い比率を占めている。

漢字表記語の72%に付されている振り仮名は、「語根を同じくする見出し語ごとに、同漢字表記語のものうち、初出の漢字表記語に振り仮名をつける。ただし、振り仮名の語形が変われば改めてつけなおす」という基準の下で付した。この基準は、全漢字表記語に振り仮名を付さなくても、全漢字表記語に振り仮名を付したのと同様の効果を生み出している。

『附音挿圖英和字彙』の振り仮名のうち、意味読みの訳語に付されている振り仮名は読者たちに馴染んでいない漢字表記語の理解を助けるためのものである。

『増補訂正英和字彙』における訳語の増補は、体言類の増補が大部分を占めている。明治初期の英和辞書として西洋の新しい概念や物事を表す訳語を多く載せるためであると考えられる。

『増補訂正英和字彙』には、『附音挿圖英和字彙』に比べ、振り仮名の数が大幅に減少している。その理由は、語形が分かりにくい語に限って振り仮名を付そうとした『増補訂正英和字彙』の振り仮名の付け方と漢字の字音読み化や送り仮名の訂正などを通して漢字表記語の語形が明確になったからである。

日本語として馴染みにくい漢語の使用が多いにもかかわらず、『英和字彙』は当時の知識人たちが西洋の新文物を理解するための貴重な英和対訳辞書であった。これらの影響を受けた英和辞書類が次々と出版されたことなどは、当時、この辞書がどれほど重要性を持っていたのか裏付けてくれる。

今後の研究では、上のように明らかにした『英和字彙』の訳語の性格が江戸末期・明治初期の言葉の性格をどのように反映しているのかに関して考察する必要がある。つまり、『英和字彙』の訳語が新聞や雑誌など他の資料の言葉とはどのようなかわりを持っているのか分析することで、江戸末期・明治初期の言葉の性格を反映している英和辞書としての『英和字彙』の性格が一層明らかになるであろう。

語構成は、言葉の性格を究明するための重要な分析方法である。本論文では、『英和字彙』

に見られる造語成分「者」に関して分析を行った。造語成分「者」の研究では、「者」の持っている語感や結合の自由度など「者」固有の性格や造語成分「人」を含む語から造語成分「者」を含む語への交替など明治初期から中期にわたる訳語の変遷がうかがえた。明治期には、造語成分、特に、字音接辞が造語力を発揮する時期である。『英和字彙』には、〈否定〉をあらわす「無」「不」「非」、〈人〉をあらわす「家」「者」「人」「士」など多様な字音接辞が用いられている。これらの分析を進めることにより、明治期以降の言葉の生成過程の一端を明らかにすることができよう。

本論文では、『英和字彙』に見られる句訳に関しては詳しく論じていない。句訳（『附音挿圖英和字彙』）から単語訳（『増補訂正英和字彙』）に交替されるものは、その逆に比べて、非常に多い（〈表 8〉参照）。句訳から単語訳への交替は、明治期における単語の増加を捉える上で、興味深いことである。句訳が単語訳に交替されるために用いられる造語成分の語感や造語力など語が持っている固有の性格に関する研究のほか、新しい職業の創出などに関する分析など多様な方面からの研究が必要となる。

『増補訂正英和字彙』には、特定の分野に関する用語が多く載っている（〈表 7〉参照）。

『増補訂正英和字彙』が刊行される明治期は、このような用語が多く造られた時期であるが、これらの語すべてが現代の日本語で用いられているとは限らない。明治期の訳語における現代日本語への影響という観点から、『増補訂正英和字彙』に載っている特定の分野に関する用語と現代日本語のそれと比較を行い、現代日本語に影響を与えたと見られる語の性格を分析することは現代日本語の性格を究明する上で有意義なことと思われる。

以上のように、『英和字彙』の訳語に関する研究を深めるとともに、明治期の他の資料に見られる言葉とはどのようなかわりを持っているのか、その結果、それが明治期の言葉の性格をどのように反映しているのかに関して一層研究を進めることが必要であろう。なお、『英和字彙』の訳語が現代日本語とはどのようなかわりを持っているのかに関する研究も行うべきであると思う。